
飛び出す絵本

あゆみかん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

飛び出す絵本

【Nコード】

N8712H

【作者名】

あゆみかん

【あらすじ】

【S不思議ホラーノしかし怖くないノ全5話】 不思議は、存在する。不思議は、7つあった。本来は、6つしかないはずだった。7つめが存在することが、不思議である。知りたいか知らなくていいのかは……あなたに任せよう。

飛び出す絵本・その1

今年に結婚して子どもが生まれ、幸せかと思いきや奮闘と心労の毎日だとブログに書き綴っている姉から、ある日に『命令』を受けた。

『何でもいいから、絵本買ってきて。子どもに読んであげたいから』

携帯電話越しに、俺は姉からそう頼まれる。姉の名前は美希、生まれて数か月ほど経つ姪は優希ゆつきといった。まだ高校生である俺は、どうせ部活も、ろくに勉強もしてないんだろっから暇でしょあんた、と、姉のいいように使われたりしている実際どうしようもない健弱ボーイでゴメンナサイだった。密かに毎夜、黒酢を飲んでいる。体にいいだろうと思っていた。

「絵本だあ……？ 何で俺が」

たぶん外出するのが邪魔くさいのだろう、弟の俺がいたら、俺を使って楽をしようとするのが度々にある。姉は口がよく動き頭の回転が早いのだが、考えずに話すので俺が体裁を整えてやることもあった。もう少し落ち着きがあればいいのにと何度でも繰り返し思っている老けた俺。

仕方ないかと、言われた通りで何処の部活にも所属していないしバイトもない、彼女もいない暇な俺は、学校の帰りに本屋へと立ち寄っていた。

児童書コーナーは店の奥だった、非常に助かる。もしコンビニみたいに外から丸見えな所に設置されていたらと思うと背筋が凍るだろうよ、同級生や女の子に見られたりでもしたら……俺は、何て裏で囁かれてしまうんだろうか。「キヤー、間島君、ステキ」……そんなはずはない。

恥ずかしくても頑張れ俺、絵本コーナーは突き当たりの角を曲がってすぐだと天井近くの案内看板には書いてある。

幸い、子どもどころか人がひとりも辺りにはいないようだった、もの凄くホツとした。

さつさと適当に見て選んで、買って帰るか。俺は陳列されていた棚と、そばにあった回転式の小さな棚を交互に見ていた。絵本といつてもどういのがいいのだろうか、姪、女の子だから、お姫様や可愛い動物なんかが出てくる方がいいのだろうか。電車や戦隊ものは違うよなあ。

そんなことを考え巡らせながら、順番に棚の本を見ていつていた。するとだった。

『飛び出す絵本シリーズ1』

背表紙に、それだけが書いてある厚さ数ミリの本を見つけていた。「お、こんなのでいいんじゃないか」俺は躊躇わず手にとっていた。よく工夫されて、切った紙の部分を折り立てて、本を開けばそこに書かれた絵や文字が気持ち少し立体になってまさに『飛び出す』仕様になっているんだ、昔からよくある。俺の小さい頃にも家にあったのではないかな、探せばあると思うが、懐かしい。

立体に見ることができる特殊な眼鏡をかければ、本のなかの住人が本当に動いているように見えるっていう現代的な本を紹介されていたのをテレビで見た覚えがある。あれの類似かもしれない、だったら面白いな、姪も喜んでくれたらいいのだが。

俺はタイトルだけが書かれていて白いその本を、開いてみた。

そういえば絵本のくせに、何で表紙も裏も絵が描いてないんだろつかと疑うのがちょっと遅かったようだった。ばさ、ばさばさばさ。

目の前がいきなり白い世界になり、鳥のような羽音が一斉に響い

ていた。俺は一度の衝撃で、手元から持っていた本を滑り落としてしまった。

(な、何だ?)

俺は尻もちをついて、今、何が起こったのかを確かめに周囲を見渡した。すぐに分かった、壁際、本棚の上、高い所に『それ』たちはいたからだった。

本だ。

見開いた状態での。

鳥のように自由に、羽ばたいているかのように見えた。

「えええええ」

俺は冷静な判断を下した声を上げた。何だあれ、『本』なのか？ひとつではない、3、4冊はいた。羽に似た紙面は白っぽいが、絵は描かれているようで柄が見える。もしや……。

『飛び出す絵本』

確かに。絵本から絵本は飛び出した。そうだな、それは納得しよう、だが、忘れてはならない事柄がまだあった。

飛び出す絵本シリーズ、『1』。

お気づきの通り、シリーズだということだ。だとしたら、2、3と続くつもりである……俺はどうしたらいいのかわからないが、とりあえず落とした本を本棚に戻すついでに、背を向けて並んでいるシリーズ数冊をざっと目で流して口に出さずタイトルを読んできた。

虫、花、動物、家族、小笠原権左衛門……

サブタイトルにそう書かれている。虫、花……動物……本当に飛び出してくるのか、これらが？ とても信じられなかった。いや、実際、本のなかから本が飛び出しているのを見ているわけだから、有り得てしまうのではないだろうか、……いずれにせよ。

俺の好奇の手は止まらなかつた。まずは『シリーズ2・虫』と背に書かれた本を引っ張り出そうと指にかけていた、だがふと、嫌な予感があったのでその手は止まってしまったのだった。

虫とはいっても、蝶やトンボの類ならまだいいが、蛾やハエや蜘蛛だったらどうするんだろうか、さらに、羽の生えた蟻やゴのつくあの最強の虫だったりしたのなら……俺は、その隣にある『シリーズ3・花』の方へと指を移していた。

花なら、安全なのではと……だがしかし、棚から取り出しかけて表紙の絵を見た途端、その本をすぐに棚へと戻してしまった。食虫植物、ハエトリグサのイラストが色鮮やかに描かれていたからだつた。気味が悪い……。

「ええいもう、何なんだよ、この『シリーズ』は！」

俺はひとりで叫んでいた。みつともないと知りつつ、誰もいないからいいと開き直っていた。ばっさばさ……隅の一角で、羽音は聞こえている。

この本屋に来てから数十分が経つが、何でこんな所で頭を使って悩んでいるのだ、この俺は。馬鹿馬鹿しい、そもそも買って姪に与える本だぞ、何かが飛び出してきたなら危ないではないか……俺は自分を落ち着けていた。

俺はシリーズからは遠ざかり、『えがおいっぱい』とタイトルが書かれお母さんと子どもの顔がにこにこ仲良く笑っているイラストが描かれた本を平積みされていた所から抜き取って、持ってレジへと直行して行った。飛び出した本は放置し、後で店員さんが片付

けてくれると決めつけて本屋を去って行ったのだった。

その日は姉の住む家に立ち寄って、本を渡して帰宅した。後日に姉から電話がかかってきて、「今度お礼にソーメンでも送るよ、お中元の時期だし」と言われたのだが、「飛び出さないよな?」と聞き返してしまった。案の定、姉は「はあ?」と素直な声を受話器越しに上げた後、「そうそう、買ってきた本だけ」と何かを言いたげに話を持ち出していた。「何?」

姉によると、俺が直感だけで買ったその本には約一万にもなる数の笑顔写真ばかりが掲載されていて、笑顔多すぎなんじゃないと言われてしまった。なるほど。

今どきの絵本は侮れないのだろうか、進化しているのだろうか?

……電話を切った後、俺は思い返していた。

『飛び出す絵本』シリーズには、小笠原権左衛門の次にもう1種あった。その先がないため恐らくそれがシリーズ最終となると思われるのだが、俺は気になっている。

飛び出す絵本シリーズ7・『幽霊』。

開けてはいけないパンドラの箱のような気がしていた。

飛び出す絵本・その2

妹の希奈が、遊んでいる最中に木から転落して大ケガをし入院生活が始まって、俺を心配させていた。「大丈夫だよ、お兄ちゃん」今年の秋に5歳となる年の離れた妹は、いつも明るかった、頭と頬、右手右足に包帯やガーゼが施されていた。これら全部がとれるようになるまで、あと何週間か、何か月くらいかかるのだろうか、遊び盛りなのに不憫でならない。

何か、妹が喜ぶ物はないだろうか？

すぐに考えついたのが、絵本を与えることだった。つい先日頼まれて本屋で物色していたことを思い出したのだ、それでいいだろうと俺は納得し早速、学校の授業が終わった後に気持ち急いで本屋へと駆け込んで行った。

高校生の、しかも男が児童書のコーナーにいるだなんてどう思われるんだろうかと恥ずかしくも思うが、ここに来たのは近日で2度目だ、もう慣れたことにしておこう、あまり気にはそんなにしていなかった。

幸いに誰もいない。

俺は店の奥にある絵本コーナーの前で、本棚に並ぶ絵本の背表紙群集を眺めて腕を組んでいた。「みんなの動物園」、「羽の生えた賢者たち」、「おおきくなってねくまごろう」……選ぶのが面倒でもうどれでもいいような気がしてきた、その時だった。

『飛び出す絵本シリーズ7・幽霊』

幽霊？ 俺は心のなかで問いかけながら静かに本棚からそれを引

き抜いていた。シリーズと書いてありながら、あつたのはこれ1冊だけだったようで、裏表紙を見てみると出版された順にシリーズ名が並んでいたのだった。1は1のままで次から順に名が付いている、虫、花、動物、家族、小笠原権左衛門……って、何だその権左衛門というの。冗談なのか？ 飛び出す小笠原権左衛門。落ち武者が井戸から出てくる光景を想像してしまった、どうでもいいことだ。

まあいい、三つ目のお化けイラストが描かれている、この本のことが気になっていた。

「どういうことなんだろうな？ ……開ければ分かるか」

言いながら、表紙の大きさがA4サイズくらいになるその幽霊とやらが飛び出す絵本を、ゆっくりと開いていった……

ぎいいいい……

木の軋んだような音が聞こえた、と思ったが、それは幻聴だったようだ。本から一瞬だけ注意が逸れて空中や上を見上げ、周りを見るために振り返った、だが客も店員も誰もいる気配は全然なく、本当に気のせいだったようだ、と認識した。

「……………」

再び、本の中身へと視線を運ばせる。だが奇妙なことに内容どころかその本、何も書かれてはおらず、真っ白なページが2、3ページと繰り返されるだけのものだったのだ。

「どうなってるんだ？ 人をおちよくってんのか？」

表裏をひっくり返してみても何も変わらない本を、俺は閉じて黙って元の所へと返していた。納得のいかない俺の気は治まらず、「こんなもの買わせて騙すつもりか、何処の出版社だよ……まったく」と不満をこぼしながら出版社名を確かめていた。「なななななななな」出版、らしい。そう背表紙の下部に書いてある。「意味わからん！」

俺は速やかに立ち去った。絵本は諦めて、月刊の少女雑誌と週刊少年雑誌を購入して帰った。少年雑誌は週読しているわけではないのだが、少女雑誌を買うカモフラージュになるかと思ったから一緒に買ったただけだ、もちろん、少女雑誌を読むのは希奈で、俺ではない。

とりあえずそんでいいやと、本屋をあとに俺は夕方の町なかへと消えて行った。

現れたのは、俺のあとを揺れながらついてくる奴だった、残念ながら俺は全く気がついてはいない。

……

病院へ着いたら、妹のいる病室へと直行だった。ゆっくりと引き戸を開けると、ベッドから半身を起こして小さな携帯ゲームをしている希奈が顔を上げてこちらに目を向けた。「あ、お兄ちゃんだ。それ持っているの何ー」クリクリとした興味津々の目で俺が片手で抱えている雑誌の入った袋を見ていた。「希奈に買ってきたよ」そう言つと希奈はとても嬉しそうな顔をする。「やったー！」

和やかなムードで、俺の機嫌はすこぶる良くなった。此処に至るまでは妙に足取りの重い、不快感、とまではいかなかった。ぬつとりと後ろに何かが貼り付いているような気味悪さがあった。しかし振り返ってみても誰もいないし、背中に何かが付着していたわけでもないようで、まあ気にしすぎだ神経過敏にでもなっているだけだろうとどうにか理由をつけて自分を納得させていただけだった。

「おミカンもらったの、いる？」

希奈が俺から渡された雑誌を受け取る時に、そばのイスの上に置いてあった袋入りのミカンを指して言っていた。「んじゃ、1個」

俺は袋を取ろうと手を伸ばしたのだが。

希奈は続けて言った。

「お友達にも、1個〜」

満面の笑顔で、希奈は俺の横へと取ったミカン1個を差し出している。

俺の隣には誰もいない、俺はひとりで来たつもりだった。

希奈は何を言っているのか。

「……………希奈」

俺の、張りつめた声が頭のなかで反芻している。「ん？ あれえ、違った」

「え？」

希奈が不思議そうに俺の後ろを見ようと体を左右に傾けるので、俺はとうとう我慢ができなくなって背後に振り返りしつかりと人の所在を確認した。個室のカーテンが開いてはいるが窓から吹き込むそよ風に揺れているだけで人影はなく。

「誰もいないよ希奈」

と、自信を持って言ったのだが。

「ひとりじゃなかったんだ。『お姉ちゃんたち』、だあれ？」

……………聞いた途端、背中に寒気が走り、足が震え出してきた。

無垢な我が妹なるこの子どもこの素朴な謎かけを前にして、俺の自信の塔は自身の地震でトウツ！ ……と、崩れ出していった。思考力が低迷で、頭痛さえしている。

希奈の言うことは信じられなかった、仕方がないだろう、俺の『目』には見えてないのだから。だが……………気分は悪い、俯いて背中を丸めて固まってしまっていた。

「でも、どうして右のお姉ちゃんに頭に赤いジュースをつけている

の？ 左のお姉ちゃんはお顔が風船みたい、お手でも無いし、おかしいのお〜」

俺はさらに耳を塞いでいた。「ひいいい」俺の口籠っていた小さな悲鳴に、希奈はケタケタと愉快そうに笑っていた。「お兄ちゃんてば、何でそんなに震えているのよう」

あっけらかんとして見たままを言っているらしい希奈だが、兄として男として、そんな簡単に動揺してはいけないと気をどうにか張った。それから俺は膝にこぶしで気合いを叩き込んで、勢いよく背筋を伸ばしてみた。「希奈」「なあに？」「もし伝えられるなら…お姉さんたちに言っというてほしい」

希奈は、うん、と俺の次の言葉を待っていた。

俺の言いたいことはひとつだった。こちらの要求が伝わって、スムーズに実行してくれたらいいと願う。俺は堂々とひと言だけを希奈に命じて伝えてもらった、ひとつだけ、それは。

『どうか本へとお戻り下さい』

飛び出す絵本・その3

七不思議、と聞くと大概は舞台を学校だと思っただろう。ところがそうではない場合もある。

最寄の駅から徒歩25分かかる、市内からは外れた場所に存在している、築13年にもなる木造建ての一軒屋があった、そこは。

何を隠そう、本屋だった。

店員は常時2人、アイボリー地に『HONYA』とシンプルにプリントされたエプロンを着ており、1人は必ずレジで待機、もう1人は売り場で何かの作業をしていた。客が片付けていない本をまた本棚に戻すのも、仕事だった。

あるカラッと乾き晴れたいい天気、暑さが襲う昼間だった。ウエスタン風の麦わら帽子を被った若いひとりの女性が、白い入口のドアを開けて入ってきたのだった。「こんにちは」

先に声をかけたのはドアのそばのレジに座っていた端整な顔面の店員で、読みかけていた文庫本から顔を上げて接客が始まっている。「どうも……」簡単な相槌だけをして、その女性客は奥へと静かに進んで行った。

一度女性を見送った後、レジの店員は再び読んでいた本の世界へと戻っていった、後は奥で棚の整理をしているはずのもう1人の店員にお任せである。

女性は、辺りを見渡しながら児童書のコーナーに辿り着いた。そこに行くまでに寄り道、関心を惹いた本などはなかった。最初からこのコーナーに来ることが目的だったようである。

「やっと見つけたね……」

陳列されていた本を前にして、女性の口からはそんな呟きが発せられていた。麦わら帽子から胸元にまで垂れ流されているウェーブがかかった茶色の長い髪が、顔を小さく見せていた。さらに小さく見える口元には、これまた小さなホクロがついていた。

「あっちの世界では元気にしてる？ ……もうこれで最後にしてよ」
言いながら、女性は1冊、棚から絵本を抜き出していた。その本の表題には、『飛び出す絵本シリーズ……』と書かれていた。そして、シリーズはもう1冊、本棚に残っていた。

女性は、少し緊張気味で本を開けている。

するとなかから飛び出したのは、手のひらに載るくらいのサイズの、小さなネズミのような動物だった。「キヨ、キヨ……？」不安そうに女性の方を向いていた。「ネズミ!？」

思わず叫び、手から本を落としてしまって大きな音がしてしまった。慌てたのか、店員の1人が棚の角に体をぶつけながら大急ぎで駆けつけて来ていた。「どうしました!？」「あ、いえ、あのその……」女性も慌ててしまっていた。

「すみません。この『飛び出す絵本シリーズ』、動物のを見たら、びっくりしてしまって」

女性の言い訳は、駆けつけた店員を安心させていった。「なんだ、そうでしたか。てっきり事故でも遭われたのかと」短髪で、正義感あふれそうな体格の店員は額についていた汗をたくましい腕で拭いていた。女性は俯き加減で微笑みながら、平積みされた本の上に落としてしまった『飛び出す絵本』を拾い上げ、まだ開いたままの本の上に載っかっている動物に視線を合わせていた。「ごめんなさい、まさかネズミが飛び出すなんて……」

それを聞いた店員が、「ああ、違いますよ、ネズミじゃないです」と言い出していった。

「ネズミじゃない？ そっくりなのに？」

「エゾナキといって、ウサギです、こう見えて。イリオモテヤマネコみたいに、絶滅されると言われている日本の動物です」

「ええっ、そんなんですか」

耳は丸く、とてもウサギには見えない小動物だった。北海道などの雪深い場所に生息し、キツネなどに捕まって食べられてしまうが、春から夏にかけて1〜5匹ほどの子を産むという。観光開発などが影響しているのか、絶滅の危機に遭っていた。

「しかしあなたは」

店員は、体から息を吐き出して落ち着き、見直したのか、女性を観察し出していた。

「何でしょうか」

「この本の著者の関係者の方ですか？ ……どうもそのような気になってしまった」

店員がそう思ってしまったのも、慌てたとはいえ、女性の驚きあまりにも一瞬のことだったように感じてしまったせいだろう、つい思っただけのことを聞いてしまっていた。「ええ、そうです。一応、婚約していました」女性は隠すことなく明るく返していた。

「亡くなられて、もう5年になりますか……」

「はい。馬鹿の失態と後始末に大変です」

目を細めながらの毒舌は、店員の度肝を抜いていた。傍目から見た限りでは、恐らく彼のなかの女性に対して持っていたイメージにヒビが入ったせいだろう。彼はたじろいでいた。「そ、そうですか…… 大変ですね。ここで何軒目なんでしょう、はは……」

「1098軒目です。売り切れだったとか、ハズレもあります。家まで押しかけて行ったこともあります。絵本を回収するのも、本当に苦労だわー。あの馬鹿やろう」

女性は段々と、怒りがこみ上げていっていた。店員は触れてはな

らない領域に踏み込んでしまつてシマツタと恐怖におののいていた。

女性が怒るのも無理はなかった。

『飛び出す絵本』シリーズの著者、横島演三郎の人生について振り返る。

彼は始め、シリーズにするつもりは全く考えてはおらず、『飛び出す絵本』を作り上げていた。それは折り紙程度のチャチな物が本から飛び出すだけのもので、鳥や本など特定されたものが飛び出すわけではなく、気まぐれランダムとにかく『何か』が飛び出す仕組みの……例えるなら、『びっくり箱』だった。

横島演三郎の技術を生かした、斬新な絵本だった。出版し購入した人々からは、毎日数通の好評内容の手紙が届いていた、それが彼の人生の操縦を狂わせることになっていくのである。

彼は調子にのつて、第2弾、第3弾と出版していった。

初版は在庫が無くなったので、『シリーズ』と改題し、動物まで再出版を繰り返していった。

……

「僕はそのシリーズ好きのひとりとしてね。例えばその本、『動物』。飛び出してくるのは、絶滅危機の動物も含まれていますからね。

こいつは何だろうって、調べたくもありません」

澁刺と店員は、自信たっぷりにそう言っていた。「ええ、そうね

……あの人の、そんなヤンチャな所というか、子どもみたいな素直さと真面目さが好きだったんだけど……」

昔を思い出す女性の顔上げた頭から、麦わら帽子が滑り落ちていった。彼の転落人生を表すかのように、ゆっくりと、底へ……

話は戻る。

第4弾を世に送り出した後、彼はスランプに陥っていた。次のをと思うが、アイディアが浮かばない、焦りで追い詰められていくように、日に日に彼は痩せこけていっていた。

その時に出会ったのが、後々に婚約者となった藤枝さち香、彼女である。

彼はさち香と結婚をしようと思った、温かい家庭を持ちたいと思い始めていた。そのため、彼の創作は続きのようだが新しく発起することになった。『家族』……

自分のために、創作をするようになっていった。

だが、この本も好評を得る。読者の心をガツチリと掴む結果となった。

読者からの手紙によれば、「寂しくなくなりました」「大事なことを、見つけられました」「アイラブホーム」「目が覚めました、地獄ヘイツテキマス」……

一体、どんな家族が本からランダムで飛び出してくるかはしれないが、演三郎は手紙のなかでこんな文面を見つけてしまうのである……

『死んだパパに会いたい』

瞬間に、彼の次に開発するシリーズのタイトルが決まったのだった。そうだ、幽霊にしよう……彼の、試行錯誤が始まっていた。何しろ、幽霊を扱うのは初めてで実験は失敗の繰り返しだった。そんななかで実験的に出版されたのがシリーズ6作目となる、『小笠原権左衛門』である。

実は小笠原権左衛門、彼の御先祖様だった。初めて特定の人物が飛び出される、だが問題はすぐに浮上してしまった。彼は、御先祖様の許可を得てはいなかったのだった。

そして、激情の怒りを買ってしまうことになり、『我の眠りを妨げるとは不届き千万』と、刀で一刀両断にされてしまったという。これが彼の最期になった。

七不思議も、ここで誕生することになった。

飛び出す絵本・その4

本の飛び出す不思議。虫の飛び出す不思議。

花の飛び出す不思議。動物の飛び出す不思議。家族の飛び出す不思議。

小笠原権左衛門の飛び出す不思議。そして……

……

「横島演三郎って……優れた科学者か何かだったのか？ ……」

間島祐一は、素朴な疑問を親切な幽霊に向けていた。「いや。

『優れ』ていたわけではないよ」「白い髪の若い学生風の幽霊は、細い指先で顎を撫でていた。

2人がいるのは、祐一の部屋である。姉の美希からの命令で本屋に赴き、そこで目にした『飛び出す絵本』のことが頭から離れる気配を全く見せず。結局に、シリーズ7冊目となる本を購入する羽目になってしまったのだった。

『飛び出す絵本シリーズ7・幽霊』

シリーズ1冊目の立ち読みで、絵本から絵本が飛び出してきたのを実際に見ている祐一は、シリーズ7で飛び出してくるものも本当にそうなのだろう、と予測し確信していた。

いいだろう、この目で確かめてやる。気になるのだから。

祐一はそう覚悟を決めて本を購入し、自宅にて本を開いてみたの

だった。

出てきていたのは、祐一と背格好が同じくらいの、少年のあどけなさが残る若い男の幽霊だった。明るく、とても爽やかな顔でまっすぐは初対面の挨拶から始まった。「こんにちは、初めまして」

「こ、こんちは……」

「君は、どうやら僕が『見える』ようだね。見える人と、見えない人がいるから……」

明らかに、自分は幽霊ですと言っているようなものだった。あまりにもあっさりとした態度に、祐一はちっとも怖くはなくなつたのである。「そ、そうですか……」たじろぎながらも、正気は緩むことがなかった。

（凄い真つ白な髪だな……。幽霊になると、こんなことになるのか、誰でも？）

理由を知りたくもなっていたが、祐一は聞かずに後で聞いたら聞いてみようと思っていた。

「それで。君は何か僕に用はあるのかい？」

いつの間にか祐一の正面で正座していた幽霊の彼は、そう聞いていた。

「ええと……特には、ありません。スンマセン」

素直に謝る祐一に、幽霊の彼は「やっぱりね」とだけ返して、そのまま後ろへと静かに倒れてしまっていた。「迷惑なんだよ、本を開かれるのつてさ……いつ、何処かで、誰かが、つてさ」

幽霊は、眠そうに大欠伸をしていた。

彼が思つのも仕方なく、この『飛び出す絵本シリーズ』は幽霊内では非常に迷惑だった。いつの何処で誰が本を介して呼び出されるのかが判らず、安らかに眠っていたのにと苦情は殺到寸前だったのである。

しかし苦情の対象となる者はすでに現実にはいない、亡くなって

しまっているのだった。横島演三郎、絵本の著者であり絵本を作り上げた、幽霊曰く『優れ』ていたわけではない科学者だったようである。

「幽霊なんて、所詮は情報の一部なんだよ」

「？」

「まあいい、幽霊のメカニズムなんてどうでもいい、それより、君がこの本を買って手にしたということは、あの女がそのうちやって来るということだな」

彼、幽霊は自分をタイヨウと名乗り、横島演三郎という人物について、こと細かく祐一に教えてくれていた。絵本の発明から、シリーズ6までの生涯においての全てを。結婚を前提とし、婚約をしていた藤枝さち香は残されて、演三郎が手がけた絵本を回収しに全国をまわっているということ。

事情に詳しいタイヨウと名乗る彼に、「あれ？ ……そういえば」と、祐一はまた素朴な問いかけを投げかけていた。

「シリーズ6で作者が亡くなったっていうのなら……『7』は、誰が作ったんだ？」……

その時だった。

ピンポーン

玄関先から、インターホンの音が聞こえてきていた。「あ、誰か来た。ちょっとゴメン、今、誰も家にいないんだ」祐一はタイヨウに断って、1階へと下りて行った。

ドアを開けた祐一を待っていたのは、麦わら帽子を被っていた長い髪の女性である。

「こんにちは、初めまして。藤枝といいます」

予想もつかなかった訪問客に、祐一はしばらく静止して状況を把握しようとする。努めていた。

「藤枝……さん」

はて何処かで聞いた名前だと思った祐一に、藤枝という女はこやかに返事をしていた。

「はい。私のことは存じておりますか？」

底も抜け目も無い笑顔をしている相手の女の顔は、祐一に僅かな抵抗感を生みだしていった。鳥肌が立ち、ぞわぞわと毛に巻き取られるかのような悪寒がしていた。「もしかして……絵本を……」と、正解を告げた祐一に、女の顔は豹変していった。

「何故知っているの」

怒りでも悲しみでもない、驚きや喜びでもなかった。緊張感の漂う、切迫された表情だった。上目づかいに祐一を見ていたが、祐一からは麦わら帽子に隠れた女の口元だけしか見えず、祐一の心臓をどきどきとさせて次第に追い詰められていった。

「知っているのって、それはそのですね……実はその……」

どう答えたものだろうかと考えが紆余曲折し迷っていると、背後から場違いな明るい声がやって来ていた。幽霊の彼、タイヨウである。

「僕が教えてあげたのさ、さち香さん。お久し振り」

朗らかな笑顔を全開に見せて、手を振っていた。「やはり。気配がすると思ったわ……この悪霊」さち香と呼ばれた女、藤枝さち香は、見据える対象を祐一の背後、タイヨウに変えていた。悪霊と罵

られていてもタイヨウは堪える様子を見せず、肩の上へ後ろに両腕を組んで回し、ぴゅう、と軽く口笛を吹いて調子づいていた。「悪霊なんて酷いな、僕が何かしました？」

さち香はこれ憤慨と、こぶしを握りしめ玄関口で怒鳴っていた。

「嘘おつしやい。シリーズ7を制作したのは、あなたでしょう！」

あなた以外に考えられない……彼の研究室から、設計図を盗んだのね!？」

怒りの目は大きく見開き、息は荒げて、帽子は、ずり落ちそうに引つかかっていた。答えるタイヨウは何処か優しく、だが鼻にもかかっているようで面白そうにしてさち香を見ていた。

「実現してあげたよ？ 師匠の最後の望み。僕は病で死んでしまっただけど、作ったことに後悔はしていない。だけど……」

続けて大きく、息を吸って吐きながら、最後、言いたいことこの文末を締め括っていた。

「貴女あなたが絵本をこのまま危険だと思っなら、どうぞ全てを回収するがいいさ……」

そうして、タイヨウは音もなく消えてしまった。あまりにもあっけなく、引き下がってしまって残された2人は、しばらくはぼおつと突っ立ったままだった。

(ええと……)

残されたうち、祐一は、こんがらかつてきそうな頭のなかを整理していた。さち香、タイヨウ、絵本の著者である死んだ横島演三郎。3人の関係は、婚約者同士、師弟関係、その他には……。

(もしかしてタイヨウさん……さち香さんのこと……)

あくまでも、ひとつの可能性を疑うたっていた。確かめようのないことだった。

「本は何処……?」

くたびれた声を出し、さち香は涙を浮かべながら祐一に訴えていた。祐一はぎくりと背筋を伸ばして、さち香を家のなかの自分の部屋へと案内していった。「どどどどどうぞ」

促されて、さち香が部屋に入った時に目に飛び込んできたものは……祐一にも、予想できなかった事態だった。

飛び出す絵本・その5

灰色のコートを着た、背の高い男が立って迎え入れている。

「やあ。苦勞をかけたね、さち香。それと、購入ありがとう君」

部屋のなかだが黒いブーツを履き、始め背を向けていたその男は振り向きざまに声をかけていた。

「横島さん……」

さち香の涙声は、男の微笑で救われていた。「本のおかげでまた会えたね……さち香」

男の足元には、シリーズ7である絵本が開いて、置いてあった。

……祐一は男の言葉に、タイヨウに関するまた新たな可能性を見つけ出していた。タイヨウが、本を制作しようとした理由である。

彼は近い将来、自分も幽霊になることを『知って』いて、この世とあの世を繋ぐ媒介を作ったのではないのかと。いやしかし、単に婚約者同士である2人のためだったのかもしれない。本人にでも聞いたところで嘘偽りなく返ってくるのかどうだかも確かめようもない疑いは、行き場がなかった。

横島 演三郎、と、さち香に呼ばれた、死んでからで初対面となる男に祐一は、固唾を呑んで事先を見守ることにしていた。

「会いたかった……行き場のない怒りは、何処へ行けばいいの？

皆、勝手にいなくなってしまう……そもそも、自分で作った本に殺されるなんて、馬鹿馬鹿しい。馬鹿馬鹿しいわ、あなた……馬鹿よ……」

さち香は横島に寄ろうとしたが、横島は両手でそれを制していた。
「……残念ながら、触ることができないね。君はまだ、『こちら』

側の人ではないから」

さち香には苦痛だったが、横島はすでに表情から汲み取っていた。「すまない」彼の心中では、詫びの言葉の羅列で埋まりそうだった。

「君が全国じゆうを渡り歩いていたのは知ってる。未練があるのは、生者の方なんだなと痛感していたさ。あの男が私のために引き継いで7番目を作ってくれたおかげで、とんだことになってしまった。君に迷惑をかけてしまったようで……申し訳ない。幽霊なんて、会えない方がよかった、君は本を回収している途中、シリーズ7を見つけてしまったために私に会えると期待をかけてしまったんだろう、非常に後悔しているよ、……すまない」

「謝らないで……」

さち香には絞り出したそれが精一杯だったが、横島が謝罪し懇々と諭したおかげでさち香に僅かながらだが生きる希望が湧いてきていた、彼の悲しげな瞳が、絶大な効果を生んだらしかった。

「あなたは素晴らしい本を作ったのに……認められなくてこんなものにあなたがとられて悔しくて……ごめんなさい……」

横島は軽くまた微笑んだ、そして、さあお別れだねと、なだめていた。

「もう本を探してさ迷わなくなつていい。本も私と同様、あるはずのないもの……『幽霊』なのだから」

……

不思議は、7つあった。本来は、6つしかないはずだった。

7つめが存在することが、不思議である。

存在するはずのないものを知ったとしても、それがその人にとっていいものだと、限らないだろう。不幸も、もしかしたらと待っている。

知りたいか知らなくていいのかは、あなたに任せよう。

『なな』が4つ、あるはずのない『名無し』出版社の、いるはずのない絵本担当の者は、こう語っている。

「不思議は、不思議を生むんだよねえ」

その通り、答えを得た者には、新たな疑問が待っている。それは、宇宙の生まれ始まりが何処かと探すことに似ている。存在しない出版社、担当者から生まれた絵本シリーズは、存在しない。横島演三郎も、存在しなかった、いや、存在『しなかった』ものと『され』た。

タイヨウもいなくなってしまった。では、さち香は？

横島は告げた……「君はまだ、『こちら』側の人ではない」と、教えてくれていた。

幽霊としての情報に書き換えられる前にと、さち香を拒絶していた。

始まりを探す前に、終わりを見つけねばならない。

7つめを探すさち香を、心優しき元人間は、穏やかな微笑を浮かべて、……拒絶した。

……

海にも近い町だった。時々、潮の香りが風にのってやって来る、そんな田舎の片隅で、その『店』は長年と傾かずに持ち続けた。町にひとつか2つしかない本屋は、とても小さく消えそうだった。しかし存在していた。

働く店員たちは、例えばだがこんな会話をしている。……

店員A「店長、明日発注するの、何でしたっけ」

店長「『全国めでたい選手権』『油ぎった乙女110番』『きつねとごんじろう』……えーと、それからだな、……ああ、あれだあれ、『飛び出せ絵本』」

店員A「へーい」

適当に会話をしている2人に、間違いを指摘する者は誰も今はいなかった。本のタイトルは無論、正確に注文されて、本屋へとさ迷わずにやって来る。『飛び出す絵本』……もうじき1000部を突破する。

制作者がいなくなっても売れ続ける、出版社がなくても作られ続ける、本を回収しようと探して歩く幽霊のような女がいるらしい……そして、店員も店長も客もあなたも誰もかれも、これが異常だとは思えないのがまた不思議だった。

店の、入口のドアは開けられた。「いらっしやいませ」

尋ねて来たのは男子高校生とまだ5歳くらいの女の子だった、ただ、女の子の頭には包帯が巻かれていて、消毒液のにおいが微かに漂っていた。2人は、病院帰りである。

「絵本見えてきてい？ お兄ちゃん」

丸い目で、顔色を窺う女の子の目は期待に満ち溢れているようで、兄らしき男子高校生は女の子の名前を呼んで頷き返していた。「いよいよ希奈。好きな選んどいで」それを聞くと女の子はとても嬉しそうに笑って大きな返事をしていた。「うん！」

飛び出す子ども。女の子の兄である長北芳樹ヨシキは、退院できてよかったとホッと胸をなでおろしていた。希奈と呼ばれた女の子は、自分の手が届く範囲で気に入りそうな絵本を一生懸命に見定めていた。幸いにも『飛び出す絵本』シリーズは棚の上部の方で、希奈が手を伸ばしてみても届きそうではなかった。

本はひっそりと、数冊が残っている。

《END》

飛び出す絵本・その5（後書き）

ご読了ありがとうございました。

あとがきは、ブログ（<http://ayumanjyu.blog116.fc2.com/blog-entry-169.html>）です（PC用）。

近日、空想科学祭2009にて連載を開始する予定ですので、よろしくお願ひします。企画は、今月9月からサイトにて開催中。SF小説にご興味ありましたら、ご覧下さい。すでに多くの方が投稿されています。

それでは、寝ます。ちーん。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8712h/>

飛び出す絵本

2010年10月9日17時15分発行